とをやなしつらん、我業とする狩も此鷲にたがふ事なしとて、それより狩をやめけると、不破翁飛驒の國に客遊せしとき、其人の語るをきゝけるとぞ、

〔視聽草三集六〕紫猿。

越後國頸城郡に住る獵師六藏といへるもの、鹿を狩んとて山中に入り、あやまりて玄ゝ穴といふおとし穴へ落いりけり、此穴深さ貳丈計も有ければ出べきやうなく、とやかくせしうちに夜も明ぬれども、人の來べきところならねば、只大空をのみあふぎ居たりけるに、いづくよりか猿五つ六つ穴の上に來り、人あるをあやしむ體にて、穴の中をうかゞひゐたり、六藏これを見て人に物いふごとく、ぬかづきて、われ誤りて此穴に落、出べきやうなし、なにとぞたすけくれよといふ、猿ども聞てがやゞ〳〵とさゝやきつゝ、いづくにかゆきたりけるがほどなく猿の聲聞ゆとおもふ程に、此度は二三十打むれ來り、穴のめぐりを打かこみ、かしましくさけびあひしが、又打むれて去りぬ、いかゞなり行ならんと心ぼそくおもふうちに、丈高く毛いろ紫なる猿さきにすゝみ、先のましらどもをひきゐ來りて、穴のうちをのぞみ立て指揮するさまなれば、六藏うやまひふしおがみて、たすけ給へとこふ、かのさるどもいづくよりか藤づる一筋もち來りて穴の中に下し、とりすがれといふべきさまなれば、其つるにとりつきければ、猿ども力をあはせて引あげたり、あまりにうれしければ、再生の恩ねもごろに謝し、猿のかげ見ゆるかぎりふしおがみてぞありける、さるにてもさきの紫猿こそ二なきものなれ、かれが皮をはぎて毛ごろもとなしたらんには、黃金を得べきものならめと、まさなき心さし起りて、携居たる鐵砲に玉藥をこめ、かの猿のあとをうかゞひ行、一うちにうちころし、皮引はぎて山を下り、やがて國のかみにたてまつりければ、未曾有の寶也とて深くめでたまひ、黃金そくばく賜ふべし、さりとても、いかにしてかゝるものは得たるや、いかなる山にて獵し及たるやと問給へり、六藏さきのことどもつゝまず聞